

夢諦めず弁護士に

「琉大法科大学院で頑張れた」

子育てと勉強両立

「目標に向かって切磋琢磨する仲間や、熱心に教えてくれる先生がいたから頑張れた」。弁護士の眞正姫さん(41)は穏やかな笑みを浮かべ法科大学院時代を振り返る。弁護士への思いを諦められず、出産後の2004年、開設直後の琉球法科大学院に1期生として入学。家族や周囲の支援を受け、子育てと勉強を両立させて司法試験に合格した。現在は、多くの人の相談や課題解決に取り組んでいる。

眞正姫さん

眞正さんは宜野湾市で生まれ育ち、普天間高から琉球大に入学。大学3年時に本格的に弁護士を目指し始めた。社会的な地位にも引かれたが、個性が重視され



「家族や仲間の支えがあったから合格できた」と話す弁護士の眞正姫さん(2014年12月25日、沖縄市のとつま法律事務所)

貴さんと結婚し、03年には長男の嗣文君を出産した。しかし弁護士への夢を諦められず「子育てや経済面でも迷った」が、合格率が高いといわれていた法科大学院の受験を決めた。嗣貴さんも快く応援した。

「独学の時は全てを知識として詰め込もうとしたが、基本的な知識の使い方が大事だと教わった。目からうろこという感じだった」と話す。法科大学院で学び、さまざまな問題への応用力もついた。

子育てのため長時間の勉強は難しく、試験や課題で何度もくじけそうになったが、長期休暇中に必死に勉強することでカバーした。全国的にも優秀だった同期生と切磋琢磨することで力を伸ばし、修了後の07年に司法試験に合格した。

13年3月に独立し、沖縄市知花でとつま法律事務所を開く。「出産や子育て、経

済的な困難を経験したからこそ、依頼者の状況がより深く分かることもある」と話す。目標は敷居が低く気軽に相談できる弁護士だ。全国的に法科大学院の志願者は激減しており、琉球大も04年度に357人だった受験者数は14年度に34人まで減少している。しかし眞正さんは子どもがいて沖

縄を離れられず、経済面でも生活費が二重にかかる県外進学は一切考えなかったという。「県内から法科大学院がなくなれば、裕福で県外に出て行ける若い人しか法曹を目指せなくなる。得られるものは大きいので、ぜひ選択肢に入れてほしい」と語った。

(沖田有吾)